

森村 桂

旅に求めた青春

旅に求めた青春

森村 桂

講談社



た.

旅に求めた青春

1973年3月20日 第1刷発行

著 者 森村 桂

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

振替 東京 3 9 3 0

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定 価 380円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1973

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0095-126380-2253 (0) (文1)

旅に求めた青春
目次

親友とのはじめての旅

ボートであわや遭難

紙芝居持ってひとり旅

海は続くニューカレドニアへ

トイレか恋か

果せなかった母との約束

永平寺に泊る

合掌造りのなかの顔

8

90

42

56

74

96

112

136

二年ぶりの雪辱

152

舌オンチの幸せ

153

唐辛子がなければ食事はできない

180

カスト制の中の自由

190

シドニーの約束

202

オッケーと寝言

216

あとがき

227

装幀・挿絵 宮田武彦

旅に求めた青春

親友との初めての旅



友だちと、はじめての長旅をしたのは、高校一年の夏休みである。夏休みは学生にとって、何と素晴らしい時だろう。その間、思う存分、「冒険」を楽しめるのだから。

園田さんという美人の親友と、私は、彼女のおばあさんの家に泊りに行くことにしていた。高山から、また電車に乗って行く、国府というところである。そこで一ヵ月近く過すことになった。

「あら、だったら、家にもいらっしゃいよ」

もうひとりの親友、というより、後に大親友になったビジヨがいった。彼女の家は天理教で、奈良にあるのだ。前から何度も誘われていた。

「よし、それじゃあ、はじめの五日は、ビジヨのところに泊ろう」

二人は、いそいそと出発仕度をはじめた。園田さんのお母さんに、

「あそこは、広い家だから、ケンカしたら、別々に寝られるし、ま、大丈夫でしょ」

といわれたのが、むしろ、不思議だった。こんな仲の良い友だちと一ヵ月も過せるなんて、そ

れだけで二人はワクワク、ケンカするなんて、とうてい信じられなかった。

ビジヨの家は、天理教の詰所になっていた。十畳の、押入も何もない部屋が、広い廊下の両わきにずうっと並んでいて、一泊、二百五十円である。この頃うんと安い旅館が六百円ぐらいだったから、やっぱりかなり安かった。といっても、朝は、麦ごはん、うすいみそ汁、たくあんだけ、夜は、これに、さばの煮つけかなんか、ほんのちょっとつくだけだった。

私は、お金持のビジヨや、ビジヨのお母さんが、そんな粗食を、

「おいしいこと、ほんとに、おいしい」

といって食べてるのが、不思議だった。東京では、ビジヨは、大きい家に住み、お手伝いさんにソックスまではかせてもらっているのに、ここへ来ると、ひのきしんだといって紺のハッピを着て、汗みずたらして働いてるのも意外だった。

私は、この、どうしてもおいしいと思えない、ちょっと水っぽいような麦ごはんを、園田さんと一緒に、ある時は途方に暮れながら、それでも、

「おいしい」

といわなければならぬのが苦痛だった。でも、ここでの思い出は、あとになって、私を助けた。私は、宗教というものはきらいだけれど、人間というものが、こうして、素朴なものを、おいしいと思って食べることは、いいことだと思った。

私は、将来、ぜひと、お金持ちになりたい、その時私は思っていた。貧しく育ち、お金持ちの

友だちを、いつも見て、淋しい思いをしていた私は、お金持ちになれば、全ては幸せになれる。そんな気がしていた。

そうなのだ、この時、私にとって、必要なのは、あとはただ、お金だけに思えた。父母の愛はちゃんとある。父が**いいものを書く作家**だという誇りもある。あとは、お金さえあれば、人はバカにしないし、みんなと一緒に映画にもいける、いつも決って仲間はずれにならないですむ。そうなのだ、お金さえも少しあれば、私は人に好かれる女の子になると、浅はかにも思いこんでいた。

だから、私は、いつか必ず、お金持ちになりたいと思っていた。でもその時**お金持ちの**幸せに、いつでもひたっていたと思った。そしてその生活に慣れてしまいたくないと思った。

お金持ちになったら、私は、赤い屋根の白い洋館の大きな家に住んでお姫さまのように暮すのだ。とりの丸焼きや、にぎり寿司、ケーキをいっぱい食べて、うんとぜいたくして暮すのだ。そう思っていた。

けれども、週のうち、一日だけは、野菜ばかりで暮そう。お肉やお魚をやめ、お菓子は、市販の安いビスケットにしよう。この時、私は、こう決心した。そうすれば、ぜいたくというもののありがたさ、お金のある生活の楽しさを、生涯持ちつづけられるだろう、私はこの時、そう心にしっかりと決めたものだ。

ここで、ほんのちょっとしたことから「事件」が起きた。いや起してしまったという方がほんとうだろう。はじめ、三人はふざけていたのだ。ビジョが、まず「ワーッ」といって逃げた。二人は追いかけた。

ビジョは、長い廊下を、ターツと走っていき、つきあたりの離れに行く板戸の左手の方をパッとあけて、走っていき、パツと止めてしまった。そのあと私が走って行って、パツとまた閉めてしまった。最後に、園田さんが走ってくる筈だったのだが、どうしたのか、追いかけてきた筈なのにこっちへ来ない。そのかわり、

「キャッー」

ダダーン！ という、すさまじい物音がわき上った。私達は一瞬ボカンとしたが、次の瞬間、ビジョの顔がまっ青になった。

「園田さん！」

ビジョは、引き戸をパツとあけ、廊下に出た。私も出た。ビジョは、今あけた戸を閉め、もう一方の戸をあけた。

「助けてー」

暗い下の方から、園田さんの声がする。何と、右手の戸をあけたところは、地下室へのハシゴ段になっていて、まちがえて、右の戸をあけて、とびこんだ園田さんは、ハシゴからまっさかさま、地下室に落ちてしまったのだ。

「ごめんなさい、どうしよう」

ビジヨが、ハシゴをあわてて降りていく。

「し、知らない……」

園田さんは、ワンワン泣いていた。

「ひどいわ、ひどい……」

私達は一言もなかった。今までの元気はどこへやら、騒ぎを知ってかけつけて来た大人たちに介抱される園田さんを横目に見て、二人は、しょんぼりとしているばかりだった。

天理教のビジヨのお母さんは、

「園田さん、あなたはとても、運がいい方ですね。もし、東京にいれば、交通事故で死んだかもしれないのに、天理に来ていたから、この程度のケガですんだんですよ」

何度もよかったよかったとおっしゃるけれど、どうも、私には、園田さんがここにこなければ、こんな戸のすぐ中に地下室があったりしないで、したがってケガもしないですんだと思うもんだから、落着かない。

「園田さん、ごめんね」

この夜、私は、ねむれなかった。ビジヨがああ戸をあけたのを、私は知ってて同じ戸をあけてとびこんだのだけど、私がとびこむ時、園田さんは、まだ、こっちの廊下に曲ってなくて、とびこんだ戸を知らなかった。それだけに、何か、わざと、何かが起ることを無意識に知っていてや

ったように思えて、私は、眠れなかった。幸い、ケガは軽かったが、打ちどころが悪ければ、死んだりすることだってあるのだ。それを思うと、私はゾッとした。

この頃、あまり二人でベッタリいるため、少々、相手がわずらわしく、ついいたずらがエスカレートしていたのだ。

そうなのだ。どんなに、仲のいい友だちでも、いや、仲がよければいいほど、長く一緒にいると、ヒステリックになってくるものだ。

園田さんのことだけではない。大の親友のビジョとも、ここでは致命的とさえいえるケンカをしてしまった。ある夜のこと、宿舎にもどってくると、三人の寝室にしていた十帖間のテーブルの上に、重々しい本が、開いてあった。

「あら、何かしら」

園田さんが、のぞきこんだ。

「あら、日記だわ、誰のかしら」

「ビジョのよ」

「大変」

私たちは、あわてて見てもいなかったそれを閉じた。そして、閉じてしまってから、二人でしまったと思った。

「どうする？ 開けてあったのが閉じてあれば、見たと思うわよ」

「大丈夫よ、あの人、そんな疑り深くないから」

とはいったものの、彼女は不愉快かも知れない。

「もとにもどしとこうよ。書きかけのところだもん解るよ」

私たちも、つまらないことで、気まづくなりたくない。日記や手紙を友だちに見られるほど、許せないことはないし、見られたかも知れないと思うのも、思われたんじゃないかと思うのもいやだった。

ところが、もとにすぐもどると思ったが、日記というものは、どれも、最後の行で終わってわけではないのだ。

「あら、ここじゃない、ええと、今日は……」

バラバラと日付けをめぐってるうちに、モリ、チンクシャという文字が、とびこんで来た。続いて、手紙という二文字である。

「待って」

私は、思わず、吸いよせられた。何と、そこには、

——今日、モリから、チンクシャあての手紙を頼まれた。何て書いてあるんだろう、そっと、あけてみると……。モリッたら、バカみたい。

「許せない！」

ボタンと日記を閉じながら、私は逆上して叫んだ。